平成２８年度末に派遣を終了した大学院派遣に係る実践研究報告書

香美市立山田小学校　教諭　田中　哲史

１　研究成果と課題を踏まえた平成２９年度の実践内容

（１）　大学院における研究成果と課題

大学院では、『教師の自己への気づきを促す研修プログラムの開発－エンプティ・チェアの教育領域における活用－』という題目で研究を行った。

教師、子ども、保護者、カウンセラーなど、考え方が多様化する中で、円滑なコミュニケーションを図るためには、それぞれの立場を理解しようとする姿勢が必要である。そして、そのためには、自分自身への気づきによって自己理解を深めることが大切であることを大学院で学んだ。そこで、自己への気づきを促すことを目的とした、研修プログラムの開発を行った。研究１で、大学院でプログラムの試行を重ね、研究２では、自分自身がエンプティ・チェアのワークショップに参加した。研究３では、所属校でプログラムを実施し、参加者にアンケート調査を行った。

この研修プログラムは自己への気づきを促すことを目的としていたが、参加者の事後調査の回答より、91.6%の参加者から何らかの気づきがあったとい回答を得られ、プログラムを通して、「他者への気づき」、「直接的な自己への気づき」、「他者をみることでの間接的な自己への気づき」が得られることが分かった。エンプティ・チェアやセルフイメージを技法とするゲシュタルト療法の理論はどういったものなのかの説明を一切行わなくても、参加者が実際に体験しながら、筆者が想定していたこと以上の気づきを得ていたことは、気づきを促すプログラムとしての有効性を示していると考えられる。

しかし、プログラムを一般化して広げていくためには、所属校だけでなく、様々な教育現場で試行し、研修プログラムとしての有効性を示していく必要がある。また、これからのチーム学校に向けて、このプログラムをスクールカウンセラーがファシリテーターを務め、実施することはできないかということも課題として残った。

（２）　平成２９年度の実践内容

平成２９年度より大学院から所属校に戻り、現在５年生の学年主任と生徒指導主任をしている。本校は、今年度より生徒指導担当が担任外ではなくなったが、「校内支援活性化事業」特別支援の視点を生かした生徒指導体制の充実の指定を受けており、毎月校内支援会議を行っている。心の教育センターから指導主事、SSW、SC、管理職、特別支援コーディネーター、養護教諭、担任、生徒指導担当で、担任から提供された事例について、児童の支援方法について検討している。支援会議では、臨床心理学で学んだ理論も使いつつ、様々な参加者の情報や考えを聞き、自分なりの見立てをするようにしている。

支援的な視点での生徒指導が教員間でも理解されはじめ、本校でも配慮を必要とする

児童への個別対応等を考え進めてきた。このことにより、学校全体は落ち着きつつある。しかし、中には、受容的支援だけでは、ルール等の枠の中で生活することが困難な児童も若干名いるため、生徒指導担当は役割分担の中で、訓育的姿勢で臨んでいる。

専科の授業の時には、極力、学校全体を巡回させてもらい、学級に入ったり、あとで気になることを担任と共有したりすることで、予防的な生徒指導にもつとめた。

２　平成２９年度の実践の成果と課題

これまでの自分を振り返ると、学年主任として学年全体のことまでは目を向けてはいたものの、学校全体に対しては、児童が何か問題行動を起こしている時に指導をするぐらいで、予防的な視点で行うということはあまりなかったように思う。各学級を回って、気になる児童について情報共有する中で、担任から対応を相談されることもあったが、その際には、自分が教えるとかやってしまうだけでなく、本人にできていることに気づいてもらう話し方や聞き方が役にたった。

校内支援会議でも今までの自分なら、しゃべりすぎてしまっていたと思うが、まず聞くという姿勢になってきたと思う。学校全体としても何か起きたら生徒指導がかけつけるということが当たり前だったが、学校では、先生方がそれぞれに対応について考えて役割分担のもとに動けるようになってきたので、４月、５月当初に比べて学校全体の雰囲気は確実に落ち着いており、その頃気になった児童と担任の関係も良好なまま、学級経営が行われている。学校全体としてのいじめや暴力沙汰などの報告、学校外での問題行動等、確実に減ってきている。

しかし、全体的には落ち着いて来ても、中には対応しきれていないケースもあり、不登校や問題行動で、すべてのケースでしっかりとした対応がとれているわけではない。また、臨床で行った研究は、先生方への気づきを促す研修を開発することを目的としていたが、現場では即効性のある見立ての仕方などの研修は行ったものの、教師が自分と向き合い、気づきを促すようなプログラムについて、今年度は実施することができなかった。

さらに、もともとの自分の生徒指導のやり方と帰ってきてからの自分を比べて考えてみても、やっていることは、あまり変わっていないと思うが、以前より児童の背景について考えるようになると、言葉選びが慎重になり、同じように指導しても自分自身の指導を振り返り、悩むことが増えてきた。

指導方針がぶれるということはないが、自分自身への気づきを重要視するあまり、周りを巻き込んで「チーム学校」としての機能を高めていくことができていない。学校現場は煩雑で、生徒指導以外にも考えないといけないこともたくさんあるので、もう一度、やりたいこと、やるべきことを整理する必要がある。その中で、自分だからできることを少しずつ進めていきたい。